物質代謝論から人間と社会を考える　　下

「蝶の雑記帳 126-2」

Ⅲ．歴史は「交換」という観念に貫かれているか

前節までの記述にところどころ強い調子の文が混じっている。それは、尊敬する柄谷行人さんの新著『力と交換様式』への批判を準備するためであった。わたしはこれまで『ヒューモアとしての唯物論』や『探求Ⅰ・Ⅱ』などから多くを学び考え方を培ってきた。ところが、最近の柄谷さんの考え方についていけなくなり、今度の新著に対して批判が必要だと思うようになった。柄谷さんの新著は、現代の危機的状況の打開に向けての諸言説のなかに位置し、この思索で話題としている物質代謝論に関係する。園丁の素朴な批判は、たとえ師と仰ぐべき人であっても、ことばの表わす概念を精査せずに使用する場合に向けられる（畏れ多くもマルクスとエンゲルスに対しても）。

一般に著述は、論理の結節点となる鍵ことばを用いて観察した現象を表現するが、それらの重要な命題は本来事物事象の関係を見究めて判断を下したものである。柄谷行人の新著『力と交換様式』は、前著『世界史の構造』などに基づいてそれを前提として記述されている。そのせいで新著は、たいてい、鍵ことばをあらためて説明せず、それまで考えてきたことを繰り返すように語られる。判断の直接の根拠もあらためて丁寧に説明することなく議論を展開する。十年以上前の

『世界史の構造』を一応読んだわたしは、その内容を忘れてしまい、提示されていく命題がいくらか独断的に響くのを止めることができなかった。それは、導きの糸となった高名な思想家たちの文章が議論を補強するために次々に引用されるのに、繰り返しになるとしても、著者自身が行なった思考の要点と判断の根拠を十分に提示することが簡略化されているせいで、よけいにそう思われた。

序論冒頭に、社会構成体の歴史がマルクスの考えたように経済的土台である生産様式だけで規定されるのではなく、もう一つの土台として交換様式があるという判断が示されて、柄谷理論の図式的なイメージが四象限に分けて提示される。その四つは、A：互酬(贈与と返礼)、B：服従と保護(略取と再分配)、C：商品交換(貨幣と商品)、D：Aの高次元での回復(これはまだ不明)と表現される。「交換」ということばはこれら四段階を貫くことばとして使われている。しかしわたしには、四つは異質なのにあいまいな言葉「交換」でひとくくりにされている、と思われた。この疑問がわたしに考察を促す。

柄谷行人という人は若いときからマルクスのことを中心的に考えてきた。それが冒頭の社会構成体の歴史ということばに名残りをとどめている。しかし後期柄谷行人は、一般にマルクスに帰して「史的唯物論」と呼ばれている学説を批判した思想家の言説に引き寄せられて、マルクスが社会の下部構造とした経済的な生産様式（生産力と生産関係）よりも政

治その他の観念的上部構造に注目するようになった。そうして、経済が社会の土台をなすという考えも捨てきれないで、経済的な「交換様式」がもう一つの下部構造であり、その交換様式が観念的上部構造の「力」の根源である、というアイディアに至った。それを集大成するのが今度の新著である。

柄谷独自の「交換様式」という見方の直接的な論拠は、新著では最初に序論の 3 で示される。若いマルクスとエンゲルスのノート類をまとめた『経済学・哲学草稿』と『ドイツ・イデオロギー』がその典拠となっている。20 世紀になって出版された二つの著作は、史的唯物論を提起するものと一般に見なされている重要な著作である。後者の大部分をエンゲルスが筆記していることが知られており、そのころエンゲルスが重要な役割を果たしたと柄谷も認めている。

ここの議論に「交換様式」ということばがどのようにして抽出されたかが明らかにされている。引用されているのは、『ドイツ・イデオロギー』の次の文章である。そこに出てくる「交通」ということばは、当時マルクスとエンゲルスが影響を受けた M. ヘスという人が用いた用語だという。

> 戦争や交易のような対外交通の拡大。
>
> 征服をおこなう蛮族においては、戦争それ自体が、すでに上にふれたように、またひとつの正常な交通形態であり……。
>
> この歴史観がよってたつところは、現実的な生産過程を、しかも直接的生命の物質的生産から出発して展開し、

この生産様式と結びつき、それによって産み出された交通形態、すなわち種々の段階における市民社会を、全歴史の基礎としてつかむことにあり……。

歴史上のあらゆるあつれきは、われわれのみかたによれば、その根源を生産諸力と交通形態との矛盾のうちにもっている

この文章は、漢語「交通」と同じように輪郭のあいまいなドイツ語が使用されているからだけでなく、若さのせいかよく整っていない、とわたしは思う。そういう文章が「生産諸力と交通形態」と言っていることに注目して、柄谷は、マルクスとエンゲルスが資本や国家を「生産力と生産関係」ではなく「交換」という鍵ことばで見るようになったのだ、と主張する。

しかし、その解釈は元の文章の意味をずらしている、とわたしは考える。三番目の段落の語句の連なりは、「現実的な生産過程を、（*しかも*直接的生命の物質的生産から出発して展開し、この生産様式と結びついて産み出された）交通形態すなわち（種々の段階における）市民社会を、全歴史の基礎としてつかむ」と整理することができる。ただし、このままではイタリック表記した「*を*、*しかも*、*を*」が日本語の調子を乱す。わたしは、関係代名詞や修飾句や読点を多用するドイツ語の長い構文が日本語を乱したのではないか（ひょっとしたら、「*を*、*しかも*、*を*」は連辞 und か何かではないだろうか）

と推測する。この文の主題的語句は、4 番目の段落の「生産諸力と交通形態」と同じように連結された、「生産過程と、交通形態すなわち市民社会」だ、と推定できる。

この解釈では、「生産過程と市民社会」が全歴史の基礎である、ということになる。エンゲルスとマルクスは、人間の歴史を、物質的な事物とその事象として存在する「生産過程」と「市民社会」に注目して、理解しようとしたのである。この解釈は、一般的な『ドイツ・イデオロギー』の文章解釈によく調和する。Wikipedia「ドイツ・イデオロギー」がこの解釈が正しいことを証言する。Wikipedia の記述はしばしば正確さを欠くが、そこに引用される『ドイツ・イデオロギー』自体にある他の文章が、「生産過程と市民社会」が対となる鍵ことばであることを裏書きする。再録すると次のような文章である。―― これまでのすべての歴史的段階に存在した、生産諸力によって条件づけられ、またそれを再び条件づける交通形態は、市民社会」であり、「すでにここであきらかになるのは、この市民社会があらゆる歴史の本当のかまどであり、舞台であるということ、また現実的諸関係を無視し、大げさな政治劇に限定されたこれまでの歴史観がいかに馬鹿げたことなのかということだ」――。Wikipedia は、この文章を引いたあと、〈生産諸関係や市民社会が歴史段階を規定する〉と書く。この段落の初めに示したわたしの解釈はこれと一致する。

以上を総合して整理すると ―― 生産諸関係や市民社会が歴史段階を規定する。歴史的諸段階に存在した市民社会は、まず生産諸力によって条件づけられのであるが、生産諸力の条件づけを再び条件づける現実的諸関係によっても条件づけられる。ことばを足すと、市民社会は生産諸力・生産諸関係・現実的諸関係のあいだの「交通≈交互作用」の場であり、その「交通」が市民社会のあり方を条件づける、と言っているのである。そして、その「場」に作用している「交通≈交互作用」のあり方、つまり市民社会のあり方を「交通形態」と表現しているのである ――。

エンゲルスとマルクスは、当時多用されていた「交通」ということばで表現したのであるが、ここに出る一般的なことば「交通≈交互作用」を「交換」に限定しておいて、さらに、「贈与と返礼」や「服従と保護」や「商品交換」などが歴史段階を規定したと考えるのには無理がある、とわたしは考える。それでは、歴史段階を規定する最重要な条件「生産力と生産様式」を消去することになってしまう。

参考までにつけ加えると、Wikipedia は、著作『ドイツ・イデオロギー』の意義は唯物史観の基礎を作り出したことだとし、生産諸関係を「土台」、国家やさまざまな意識の形体を「上部構造」などと表現したことを挙げている。そして、その後のマルクスは、「市民社会」を解明するために経済学の研究に没頭して、史的唯物論に言及することはほとんどなかった、と指摘する。また、マルクスとエンゲルスは、この著作では「生産のなかで人間が結ぶ社会関係を交

通形態」と呼んでいるが、以後の著作ではほとんど登場しないとも指摘している。

以上の議論は、柄谷の引用した『ドイツ・イデオロギー』の文章は、マルクスとエンゲルスが「資本や国家を〈交換〉から考えるようになった」のではないことを示している。

もう一つ次節の考察に関係することに触れておこう。柄谷は、M. ヘスが人間と自然の間にも「交通」を見出したと指摘し、「交通」は、人間と自然の間の相互関係、いいかえれば物質代謝（メタボリズム）である、と書いている。この文の背景には、『資本論』に現われる物質代謝論があるのだろう。たしかに、「交通」を生物の行なう「物質代謝」につなげば「交換」ということばに結びつけることができるだろう。しかし、メタボリズムは主として生体内の物質の交代を意味していて、その語義では、摂食と排泄によってなされる人間と自然の間の相互関係は二次的なものである。摂食し排泄する人間の生活に生産活動など全活動を含めて考えるとき初めて、社会的な物質代謝が人間にとって重要な問題となり、さらに、人類と自然の間の相互関係（メタボリズムということばでは言い尽くせない）が重大な問題となるのである。

このあと議論は、エンゲルスとマルクスのあいだに切れ目を入れて、エンゲルスの主導した『ドイツ・イデオロギー』の考え方からマルクスを引き離す方向へ進められる。

しかし柄谷行人は、自分のつかんだ「交換様式」というアイディアだけは維持して、序論第 4 節へ進む。1848 年の革命の挫折のあと、マルクスは、いったん批判してきたヘーゲル哲学を再導入した、と見るのである。観念論にもどったのではないけれども、資本制経済の中に一種の「精神」の活動を見出した、と。柄谷流に言えば、「マルクスが『資本論』で書こうとしたのは。商品物神（物に依いた霊）が貨幣・資本へと発展し、社会総体を組織してしまう歴史」ということになる。その歴史を、「精神（霊）が自然的・直接的な形体から発展して自己生産するというヘーゲル（の弁証法）の論理に忠実に従いつつ編成した」のだということになる。「ヘーゲルの観念論をひっくりかえす」というマルクスのことばを引用しているけれども、この註釈は実質的に、マルクスが唯物論的な史観から観念的な世界観へ踏み越した、と主張しているようにわたしには聞こえる。

実際このあと、「『資本論』で描かれるのは、物に依いた得体のしれない霊が、産業資本主義として全社会を牛耳るにいたる過程である」や、「観念的な力を、経済的“次元”に見ようとした。ただし、それを〈生産〉ではなく〈交換〉に見たのだ」などということばがくる。こういう文章が続くなかに、社会で人類が生産物を生産・加工・運搬・交換・消費する「生産過程」で、「交換様式」が最重要だとする明解な説明はない。そして、第 5 節では、「人間の社会史は、人間の意図を超えたものであり、むしろ〈無意識〉によって強い

られたものである」と言う。この文章の結論部には事物的ではなく実証することのむずかしい事象的な働き「無意識」という概念が登場する。第4・第5節の文章群全体は、大いに観念論的な世界観を説いている、と言わざるをえない。

ここで、柄谷行人さんがなぜそういう説き方に引き込まれていったか、見方を変えて推測してみよう。わたしの読んだ限りで、その著作は、マルクスの書物をくりかえし考察してきたことを示していた。『資本論』の「資本は剰余価値を積み上げて果てしなく増殖しようとする」という中心命題は純化されて自家薬籠中のものとなっていただろう。「資本の論理」は、法則ともいうべき形で認識され、ほとんど観念に高められたのかもしれない。

むげにしりぞけることができないでいるうちに、そもそもマルクスに柄谷さんの受けとったものがあったのだと考えるようになった。マルクスは、「資本」にまつわるすべてを考え尽くしてそれを描き切ろうとした。そのなかには観念的な考察も当然含まれているのだ。誇張して言えば、切れ味鋭いことばのつくり上げる文章は言霊(ことだま)が宿るように聞こえ、多くのマルクス主義者が魅了されて、中には教条主義的に信奉する人まで現われた。しかしマルクスは、資本の「物神」的な作用を語っただけではなかった。資本が人間を「疎外」することを語った。若いころからマルクスとエンゲルスが一生をささげた仕事は、資本が人間の生活を圧迫し苦しめるのを

やめさせようという目的でなされたのである。

だから、『資本論』でより重要なのは、資本主義システムが生み出す「本来あってほしい人間らしい生活からの疎外」を改めることである。それを語るとき、「物神」や「霊」ということばを強調して「資本の論理」を観念的に語るのは正しくない。現実の人間の生活の場にもどって具体的に「資本の運動」に介入するほかにわれわれの手立てはない。

真理とか法則とか論理とか呼ばれて尊重されるものに人間はどのように向き合えばよいだろうか。物理学の場合で考えてみよう。力学法則と量子力学の法則は極めて抽象的だし、そこで働く重力と電磁気力は古い考え方では事物的なものとは思えないほどであった。けれども、自然科学の法則を観念的なことばを使って説明することは行なわれない。人間の生得的な認識能力が到達した認識をただ淡々と受けとめるのが、人間にできるまっとうな行ないである。社会を構成して営まれる人間の生産活動で観察される資本のめくるめく論理も、同じように自然的でかつ人間的な事象として冷静に受けとめればよいのである。そうしなければ現実的で有効な対処をすることはできない。わたしは、自然と人間をそのようにとらえる。

「資本の論理」に関係してつけ加えたいことがある。マルクスとエンゲルスは、人間の事象をヘーゲルに倣って弁証法

的にとらえた。ところで、ヘーゲルは、人間の精神が認識を高めていくやり方を弁証法と呼んで、人間の側に弁証法があると考えた。しかし、カントの認識論を基礎として発展した科学的認識論の枠組みは、人間の直感に形式的な論理以上のものを仮定しない。それでいて、認識された自然が示す論理は驚異的なもので、人間の精神のたまものとされる弁証法よりもはるかに重層的で複雑である。弁証法は、カントの『純粋理性批判』の文章に読みとれるように、人間理性の本性的な傾向として現われるが、本来的に自然（人間は自然の一部として内包されている）の機構にある、とわたしは考える。この考え方では、人間の認識活動・精神活動は、自然である人間に具わる認識（“情報処理”）機能が作動して対象・表象を“操作処理”して行なわれるのである。

さて、まだ序論に触れたにすぎない。柄谷さんの新著はかなりの分量をもち議論はさらに続く。しかし、それについての考察をこれ以上続けるゆとりはない。感想を言えば、哲学者柄谷行人の考察は、現実の事物事象に密着して考えて概念を論理的に整頓するよりも、多くは論じられてきた重要な観念を吟味し自己の新たな観念を加えて立論する哲学伝統のアプローチに沿っていると思う。

Ⅳ．人類史と自然史を統合する観点

マルクスの『資本論』は現実の事物事象と対峙しながら概念を論理的に整序する研究書である。それを端的に表わしているのが「物質代謝」という概念である。斎藤幸平が、後期マルクスのノートから、この概念を掬い出して今の時代にふさわしい物質代謝論を提起している。その物質代謝論は、現在われわれが直面している経済・社会問題と人類の生産活動がもたらす環境・資源問題 —— 二つの問題は人間の生活をゆがめて苦しめ、人類の生存さえおびやかしている —— を撃とうとしている。その議論を深めて、二つの問題に取り組む行動を生み出すことがさし迫った課題である。

園丁ができることはわずかだが、このノートでは、マルクスのノートと斎藤の著作『大洪水の前に』とで用いられていることば「物質代謝」にわずかに欠点があるということを指摘したい。このことはすでに第Ⅰ節で簡単に考えたが、輪郭のあいまいなことば「物質代謝」を修正すれば、二つの問題 —— いずれも現代資本主義経済が生じさせている —— を必要なだけ区別してとらえることができる。そして、現代資本主義システムの変革のための統合的な取り組みにおいて、二つの問題両方にもっと焦点を合わせることができるだろう。

著書『大洪水の前に』の当該の箇所で具体的に見てみよう。斎藤は、「物質代謝」という用語に焦点を当てて説き起こし

て多くの箇所で論じている。そのなかで、第二部第四章が、マルクスが「物質代謝」という用語で経済学批判を行なうようになった事情を明らかにしている。マルクスは、自然科学の知識を農業に適用して社会経済的な事象にアプローチする当時の研究に触発されて、そこで使用されていたそのことばを使うようになったのである。

『資本論』第三部草稿には、リービッヒという人の議論に依拠して、次のように書かれているという。

ア　こうして大土地所有は、社会的な物資代謝と自然的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すのであり、その結果、地力が浪費され、この浪費は商業を通じて自国の国境を越えて遠くまで広められる。

この文でマルクスは、――「社会的な物質代謝」（資本主義的な生産・交換・消費活動）と「自然的な物質代謝」の「連関」に、世界規模で深刻な攪乱が生じることを指摘している。そこには、資本主義の経済的形態規定と素材的世界における自然的諸制約のあいだに存在する緊張関係がはっきりと表現されている ――、と斎藤は力説する。これが、斎藤の受けとめたマルクスの物質代謝論の核心である。

ところが、出版された『資本論』では前半の文章が次のように変更されている。

イ　こうして大土地所有は、***社会的な、生命の自然諸法則に規定された物質代謝の連関***のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出す

マルクスの死後に出版された書物はエンゲルスによって編集されたが、ごく最近まで『資本論』はその修正文で読まれてきた。斎藤は、エンゲルスによるこちらの修正文はマルクス本来の物質代謝論を歪めた、と言う。たしかに、マルクスのノートに記された文章の明快さが失われている。斎藤は、その著書でマルクスの思想へのエンゲルスの貢献を強調することを忘れないが、物質代謝論に関して両者に差異があると認めて、エンゲルスの自然観に批判的である。しかし、斎藤の考え方に共感する園丁は、その批判をちょっとだけ待ってほしい。

柄谷行人のような『資本論』研究者のなかには、エンゲルスを遠ざけてマルクスの考え方を“純粋な形”で擁護しようとする人がいる。たしかに人間は生活にまぎれて友人関係さえ危険にさらすことがある。しかしマルクスとエンゲルスは、終生友人関係をよく保ち、互いの考えを伝えあい思想の重なり合いを保つように努力した。それは世にまれな友人関係だった、と言えるだろう。だから園丁は、物質代謝論についてエンゲルスを弁明する議論をしよう。

じっくり見れば、イの修正文は文法的におかしい。翻訳文だからではないだろう。形容語「社会的な」が孤立していてどの単語を修飾するのか不明になっているし、うしろにある

複数のもののあいだを関係づけることば「連関」が本来の働きをしていない。「連関」がつなぐべき単語は何と何だろうか。疲れていたエンゲルスが筆記するときミスを犯したのだろうか、それとも植字工がミスを犯したのだろうか。園丁は、孤立した語「社会的な」を、元のアの文と同じことばを足して「社会的な物質代謝と」にすれば、イの文は意味が通るようになる、と考える。すなわち、次のように修正するのである。

ウ　こうして大土地所有は、社会的な物質代謝と、生命の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出す

一つの単語「物質代謝」を加えるだけで、ウの文は、文法的に正当になりアの文に近づく。よく見ると、アの文でも、「社会的な物資代謝と自然的な、」となっていて、読点の用い方が適切でない、と思われる。こちらの読点が「社会的な物資代謝と」のあとにあれば、「社会的な物資代謝と、自然的な（土地の自然諸法則に規定された）物質代謝の連関」という文になって、語の流れが整う。

ともかく、このように整序して読みとれば、アとイの二つの文は、同じく、「社会的な物資代謝」と「自然的な物質代謝」を論じている、と分かる。両者に矛盾はなくなる。

それではなぜエンゲルスは、マルクスの書いた語句「自然

的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝」を、「生命の自然諸法則に規定された物質代謝」と書き換えたのだろうか。園丁は、マルクスの『資本論』は経済の事象を主題としているから、「物質代謝」ということばで主として表現しようとしているのは、生物としての人間が生活を成り立たせるためにしている「生産活動」だ、と考える。そう考えれば、「社会的な物資代謝」ということばが指しているのは「人間集団が構成する社会における生産活動」であり、「自然的な物質代謝」の方は「自然に包含される人類全体の生産活動が自然に及ぼす作用」を指す。

ところが、すでに第Ｉ節で示したように、ドイツ語の「物質代謝」ということばが「生物体の生理的な物質代謝」と「自然界で起きている(諸)物質(連関)変移」の二つの意味を含んでいて、それがアの文章にゆらぎを生じさせるのである。比較して自然科学的な見方をする傾向のあるエンゲルスは、「物質代謝」ということばの含む多義性に敏感で、生理学的な意味に引かれて「生命」ということばを使いたかったのだ、と推測される。「人間集団の物資代謝」と「人類全体の物質代謝」のうち、とりたてて後者に「生命」ということばを被せる必然性はない。だが、人間を自然のなかにおいて観る傾向の強いエンゲルスは、自然を「(諸)物質(連関)変移」ととらえた、と推測される。ところが、後者の「(諸)物質(連関)変移」への作用の原因が「生命」にあることを強調したかったのか、「生命」という語を被せたしまった。それがウの文章を複雑

なものにしてしまった。そのせいでエンゲルスの文章に難解さが残った、と園丁は考える。しかし、園丁の見るところ、マルクスとエンゲルスは基本的に同じ考え方をしているのである。

くどくなるけれども、ことばを足しておこう。“物質代謝”ということばは少し精密に使う必要があるのだ。「人間と自然の物質代謝」と言ってしまうと、微妙なくいちがいを生む。「人類の物質代謝」は「自然の諸物質連関変移」に内包されるのである。その内包は閉じてはいないので、熱力学第二法則に適合して人間は「物質代謝」と「生産活動」を行なうことができるのである。したがって、「人間の物質代謝と自然の物質変移」と言う方が厳密である。

以上の考察を経て、現代の諸科学の知見をとり入れてウの文を意味が明確になるように修正すれば、次のようになる。

エ　こうして大土地所有は、**社会的な生産活動と土地の自然諸法則に規定された物質変移の連関**のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すのであり、…

これが、『資本論』で説かれた物質代謝論の要点の一つである。マルクスが課題としたのは、資本主義的な社会の生産活動が、人々のあいだに貧富の差をもたらし、生産活動に従事する労働者に過重な負担をかけて、一般に人間らしい生活を困難にすることを改めることである。そして、後期のマルクスは、人類の資本主義的な生産活動が自然を大規模に変質

させて、生態系を破損し資源エネルギーを枯渇させて、人類そのものの生存を脅かすことに気づいたのである。

斎藤幸平が『資本論』から掬いとった「物質代謝・物質変移論」（「物質代謝論」をこう言い換えよう）は、人新世と呼ばれるようになった現代社会でますます重要になっている。著書『大洪水の前に』が説くことに耳を傾けなければならない。

最後に、エンゲルスの自然観について弁明しておきたい。斎藤は、エンゲルスが、「弁証法を自然のうちに見つけだし、自然から展開すること」が唯物論的な把握であるとし、自然科学による自然法則の認識が「人間の自由をもたらす」とする実践的な姿勢を強調したと指摘する。だが、ここからの議論で、斎藤は、アとイの文章の差異に関係づけて、エンゲルスの関心が、エコロジーにはなく、マルクスの社会把握とエコロジカルな問題意識と乖離すると考える。しかし、園丁は斎藤の議論は行きすぎだと思う。マルクスとエンゲルスは基本的に同じ考えをもっていたけれども、マルクスが『資本論』で人間と社会の問題に力を注いだのに対して、エンゲルスはそれと重なりの少ない領域に力を注いだのだ、と考える。

園丁は、エンゲルスの自然観が、「人類の物質代謝」が「自然の諸物質連関変移」に内包されるという考え方に通じるものだった、と推定する。人新世の時代にこの人間観と自然観は重要である。人新世は、環境・資源問題にとどまらず、わ

れわれ人間の生き方に、根源的な問いを突きつけている、と思う。

つけ加えれば、マルクスの文章を言い換えた先ほどの斎藤の説明文はおもしろいことを教えてくれる。Wikipedia を参照すると、マルクスの言う「生産様式」は、生産諸力（生産手段と労働力）と生産諸関係（生産手段の所有関係と分配関係・階級関係）の総体であり、それが「下部構造」に相当する。斎藤は、その多層的な意味をもつ「生産様式」のうち「物質代謝に相当する側面」を表現して、「資本主義的な生産・交換・消費活動」と言っているのである。斎藤の考えでは、マルクスの「生産」ということばには「交換」がすでに含まれているのである。第Ⅱ節（付録）で園丁は「生産活動」を生産・運搬・加工・交換・消費などと表現したが、それは、斎藤を含めて一般的な理解なのである。斎藤が次の文で用いる語句「経済的形態規定」にある「形態」ということばも、そこに素材的な要素が色濃くなければふさわしくないだろう。

Wikipedia はまた、マルクスは、『経済学批判』の序言で、ヨーロッパにおける「生産様式」を歴史的に、古代的生産様式・封建的生産様式・近代ブルジョア的生産様式の三段階に分ける、と書く。ここの「生産様式」ということばも「生産・交換・消費活動全体」の様式を指す、と解するのが妥当だろう。そうすると、柄谷行人のように、「下部構造」に「生産様式」とは別に「交換様式」を立てて、「交換様式」の方にむしろ

「力」を生み出す源泉があるとする考え方は適切ではないことになる。それは人間の生産活動全体がもつ諸過程を分節・単純化して見立てる見方ということになるだろう。

Ⅴ．資本増殖主義社会システムを変革し人新世を乗りきるために

園丁は、マルクスがその一人である賢人たちに習って、現実の事物事象と向き合いながら、世界を、概念を精錬して論理的に組み立てるやり方で理解したいと思う。そう考えて第Ⅱ節（付録）では人類の歴史を理解しようとしたのである。しかし、その拙い現象論的な素描では、園丁が疑問に思う柄谷行人の本質論的な人類史把握を部分的にしか批判することができなかった。

しかしもっと重要なのは、斎藤幸平の「物質代謝・物質変移論」が立ち向かおうとしているのは、この節の表題に掲げたような問題だということである。資本主義社会システムが爛熟して頽廃の気味さえ見せて、方向性を見失う人が出ている現代、資本主義の先を見通そうとする書物が多く出版されている。けれども、事後的にしか事が定まらない歴史事象について見通しを示すことは大変困難である。そのなかで、研究書『大洪水を前に』に基づいて斎藤幸平が発表している書き物は、運動へ導く打開の一歩を踏み出そうとしている点で貴重だ、と思う。

そういう実践性をもちあわせていない園丁は、あいかわら

ず素朴なやり方だが拙く考えて、この思索を締めくくろう。人間の社会にもどって考えなければならない。

人間の社会は複雑である。物質に立ち向かって物質代謝をし、社会の中でほかの人間たちと交わって生活するとき、個々の人間は現実的な力を受ける。柄谷行人のいう、人間の精神に働く目に見えない作用も人間にとって無視できないほどの影響力を与える。けれども、それらの力を概念的に区別せずに統合的に考察するのは知力のある人に任せて、園丁は、現実の場で人の行動に直接影響力を発揮する作用・力から考えることにしよう。マルクスとエンゲルスが提唱した下部構造を観念的な上部構造から分けてするアプローチも、そういう方法だと考える。

武器をもつ領主の家来が来て生産物を取り立てるのは、現実の場で働く力である。工場や事務所で雇用されて働く人々（マルクスのいう労働者）は食料や生活費をまかなうために賃金を得なければならない。その賃金なしに生活できない労働者は、現実に労働の場に出勤する力を受けているのである。粗く表現すれば、前者は、政治的な力と言えるが、生産過程に介入するから経済機構にも働く。後者は経済的な力で経済機構に働く。もちろん、どんな社会にも不文律としてある規範は、人間の行動を規制する。また、社会心理的にそれぞれの人に作用する観念的な力がある（哲学者柄谷行人はこの力に重きを置く）。

しかし、社会規範の規制力や社会心理的な力が大きくても、通常人は、何か手がかりになるものを伴わないそういう力を、眼前の具体的で直接的な力とは感じない。そういう力は「上部構造」に属するのである。園丁は、それを考える力をもたないので、手がかりのある「下部構造」を考えることにする。

経済の事象は具体的に観察でき、そこには現象を出現させる「下部構造」がある、と見ることができる。その下部構造は、物質に強く関係しているけれども、物質だけで構成されているのではない。経済事象を出現させるは「経済の機構」ということができる。その「機構」の要素は物質的な物に対応していて、経済学者なら、「機構」を形態的にイメージすることができ、経済の働きを語ることができるだろう。人間が現実的に対処できるのは、そういう「経済機構」である。

政治的な事象は観察でき、類似的に、そこには現象を出現させる「政治機構」がある、と見立てることができる。ただし、政治を作動させるのはどんな行動をするか予測できない人間や人間の集団で、政治の機構は物質的な構成とは遠い。政治の機構をよく理解して少しでも介入できる人は少ない。だから社会を政治的に統制しようとする支配者は、政治の機構を、人間で構成される組織によって体現させようとする。人民全員を組織に組み入れることはむずかしいから、社会にはその他大勢の部分が残ることになる。これが園丁の見立てである。人間の組織なら図式的に構成することができ、その

作動をことばを使って説明することができる。だから、そういう政治組織は制度として表現することができ、組織運営の規則を成文化することができる。

このように言い取った「経済機構」と「政治機構」が、経済と政治の「下部構造」の骨組みである、ということができるだろう。政治に対しても「下部構造」ということばを使うのはマルクスとエンゲルスのやり方から外れてしまうが、人間の歴史を通じて重要であった政治を、経済と並べてバランスよく把握するにはこうした方がよい、と無謀な園丁は考える。なにしろ、経済と政治は人間社会の重要な概念的構成部分なのだから。

多くの人々が諸矛盾が現われてあちこちで機能不全に陥っていてなんとかしたいと考えている資本主義システムとは、端的に言えば、二つの重要な「経済機構」と「政治機構」が現在の形態で作動している「社会のシステム」ということになる。経済の方で今では矛盾の中心にあるのは、あまりにも行きすぎた資本増殖主義である。現在の社会システムを資本増殖主義システムと特徴づけて呼ぶのがよい、と園丁は考える。

くり返せば、社会の一般的な規範は、人間たちがその本性と文化的に修得したふるまい方に従って生活するなかで、長い時間をかけて歴史的につくられる。そのとき、社会に機構

を形成させる経済や政治や宗教などが規範の具体面を特徴づける。社会に働くこの作用全体を、下部構造から上部構造に及ぶと見ることが可能なのだ、と園丁は考える。そういう社会を変えるには長い時間がかかる。大きな社会を一朝一夕に変革する、先を見通して何かを提示することはむずかしい、と愚鈍な園丁は考えざるをえない。だから、現在の社会システムを変革するには、「経済機構」と「政治機構」に手を付けて変えていかなければならないのである。ことばをわずかに変えただけだが、「機構」はもっと抽象的なことば経済や政治よりも手がかりを与えてくれるだろう。

どうやったら機構を変えることができるだろうか。経済システムを変えるには、具体的に機構に手を入れなければならない。現に働いている経済機構を変えるのはむずかしいが、一部だとしても、重要な軸や歯車とその構成の仕方を新しいものに変えたモジュールを組み立て、古いものと交代させるやり方が考えられる。比喩的に言っているが、肝心なのはシステムのどの部分を変えることが重要か、軸や歯車をどう変えるかだろう。だから、当面の利潤をあげることよりも、部分的でも良く働く理論モデルを考え出すことが必要である。経済学者や政治家たちは真剣にそういう方向で考えているだろうか。

「政治機構」を変えるには、政治組織の構成を変えなければならないが、組織を構成している役職者を変えることも重要である。官僚機構を改善するのに成功した政府は歴史上少

ないから、こちらの変革はむずかしいだろう。それでも、少なくとも、考え方を修正した人を機構の重要部署につけなければならない。選挙で国民議会の代議員を選ぶ政治制度では、一票しかもたない選挙民が投票で議会を構成する勢力を変える方法しかないが、わりあい平穏な社会を形成してきたスウェーデンの選挙民と政治家たちがお手本を示してくれている。学ばなければならない。平凡だが、政治を変えていくのに国民を巻きこむ「運動」が日本にぜひとも必要なのだ、としか園丁は言うことができない。

人新世の時代になって、資本増殖主義社会システムを変革するのは、経済の矛盾を解決するだけの問題ではなくなった。資本増殖主義社会システムは生産活動を強大にしすぎて人類の存続を危うくするものになっている。環境・資源問題を解決して人新世の世を生きるには、その問題を生み出している資本増殖主義社会システムを変革しなければならないのである。生産活動を抑制して、人類が生活している地球の諸物質連関変移を許容範囲におさめなければならない。

斎藤幸平たち改革を唱道する先駆者は、それを端的に「脱成長」と言う。この勇気ある言葉づかいは、経済成長によって必要な生活用品を入手出来ていると考えているほとんどすべての人々に考えを改めるように要請しているのである。経済成長＝資本増殖がなくても必要な生活用品は手にすることができると説いている。それは正しいと園丁も考える。

斎藤は、さらに勇気をもって「脱成長」に「コミュニズム」ということばを足す。「コミュニズム」ということばは、たいてい「共産主義」と受けとられるが、フランスでは「コミューン」は歴史的にただ「村落共同体」を意味していた。フランスでは現代でも、社会の構成要素である村落共同体が存続している。その共同体で過去に働いていた、そして今も存続する協働をよく機能させれば脱成長しても立派な生活ができる、というのが斎藤幸平の主張したいことだろう。

人類の生存を脅かす現代の資本増殖主義社会システムを変革するために、斎藤幸平は考え著作し社会運動にかかわっている。老園丁が切望するのは、斎藤幸平たちの言説と運動が新しい世代の人々の考え方と行動を変えることである。

2023 年 11 月虹蔵不見　　海蝶　谷川修